

ガバニングボード（第141回） 議事要旨

1. 日 時 令和7年6月5日（木）9：43～11：06

2. 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室

3. 出席者

総合科学技術・イノベーション会議CSTI）議員

鈴木議員（座長）、宮園議員、梶原議員、佐藤（議員、菅議員、波多野議員

内閣総理大臣補佐官

森昌文

内閣府

上山内閣府本府参与

濱野事務局長、柿田統括官、塩崎事務局長補、徳増審議官、岩渕参事官、

南部プログラム統括、持丸PD、須賀企画官、岡崎企画官

外務省

松本外務大臣科学技術顧問

経済産業省

大野経産大臣科学技術顧問

文部科学省

小安文科大臣科学技術顧問

4. 議題

（1）SIP第3期課題概要報告（意見交換）（※公開議題）

（2）SIP第3期課題概要報告（意見交換）（※非公開議題）

（3）SIP第3期ピアレビュー、ユーザーレビュー及びステージゲート委員の選定について
（承認）（※非公開議題）

（4）SIP第3期社会実装に向けた戦略及び研究開発計画の変更について（承認）
（※非公開議題）

- (5) 令和7年度研究開発とSociety 5.0との橋渡しプログラム(BRIDGE)の実施方針(案)
(令和6年度補正予算分)について(決定) (※非公開議題)

5. 配布資料

- 資料1-1 課題概要等報告(バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備) ※公開部分
- 資料1-2 課題概要等報告(バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備) ※非公開部分
- 資料2 SIP第3期「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」、「サーキュラーエコノミーシステムの構築」及び「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」のピアレビュー、ユーザーレビュー及びステージゲート委員の選定について
- 資料3-1 SIP第3期「豊かな食が提供される持続可能なフードチェーンの構築」の社会実装に向けた戦略及び研究開発計画の変更について
- 資料3-2 SIP第3期「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」の社会実装に向けた戦略及び研究開発計画の変更について
- 資料3-3 SIP第3期「サーキュラーエコノミーシステムの構築」の社会実装に向けた戦略及び研究開発計画の変更について
- 資料3-4 SIP第3期「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」の社会実装に向けた戦略及び研究開発計画の変更について
- 資料4 令和7年度研究開発とSociety 5.0との橋渡しプログラム(BRIDGE)の実施方針(令和6年度補正予算分)

6. 非公開理由(議題(2)～(5))

議題(2)～(5)は非公開情報を用いた議論を含むため、非公開とした。

7. 議事

- (1) SIP第3期「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」に関して課題のビジョンやその設定背景、実施内容及び成果の社会実装等について意見交換を実施した。

- (2) SIP第3期「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」に関して課題の社会実装像や知財戦略等について意見交換を実施した。
- (3) SIP第3期「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」、「サーキュラーエコノミーシステムの構築」及び「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」の3課題に関し、ピアレビュー、ユーザーレビュー及びステージゲート委員の選定について審議し、承認された。
- (4) 社会実装に向けた戦略及び研究開発計画について、SIP第3期課題のうち、「豊かな食が提供される持続可能なフードチェーンの構築」、「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」、「サーキュラーエコノミーシステムの構築」及び「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」の変更に関して審議し、「ポストコロナ時代の学び方・働き方を実現するプラットフォームの構築」、「サーキュラーエコノミーシステムの構築」及び「バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備」は承認された。なお、「豊かな食が提供される持続可能なフードチェーンの構築」については再度ガバニングボードで説明の上、審議をすることとなった。
- (5) 令和7年度研究開発とSociety 5.0との橋渡しプログラム（BRIDGE）の実施方針（案）（令和6年度補正予算分）について審議し、承認された。

8. 議事概要（議題（１）の公開議題のみ）

午前9時43分 開会

○岩渕参事官 それでは、お時間でございますので、始めさせていただきます。

今日は議題の関係で15分早くスタートということで、大変恐縮でございます。

本日は、伊藤議員、光石議員が御欠席ということでございます。

それでは、本日の木曜会合、ガバニングボード、最初は公開議題でガバニングボード、S I Pということですので、鈴木座長より進行をお願いいたします。

○鈴木議員 それでは、ただいまから第141回ガバニングボードを開催いたします。

本日の議題はお配りしております議事次第のとおり、議題（１）については公開で、議題（２）については非公開で意見交換を行います。また、議題（３）以降については非公開で審議を行います。

資料はガバニングボード終了後、内閣府のホームページに非公開資料を除き公開しますので、御承知おきください。

それでは、初めに、議題（１）、（２）のS I P第3期課題概要等報告を行います。

本議題は各課題の現在の進捗についてPDから御説明いただくことに加え、年度末に行う中間評価を意識した社会実装計画についてPDから御報告を頂き、意見交換を行います。このうち社会実装計画の御報告、意見交換については非公開となります。

本日は、バーチャルエコノミー拡大に向けた基盤技術・ルールの整備について、持丸PDに御出席いただいております。

それでは、まず議題（１）として、持丸PDから現在の進捗について御説明をお願いいたします。

○持丸PD プログラムディレクターを拝命しております産総研の持丸でございます。いろいろお世話になっております。よろしくお願いいたします。

通し番号006というものを御覧ください。バーチャルエコノミーのS I Pのプログラムは、14個あるプログラムの中では社会問題の解決を少なくともタイトルでは直接うたっておりませんで、どちらかというとメタバースが出てきたこの時代において、日本の産業がきちんと世界に伍していけるための基盤をつくると、こういうことだろうと私は理解をしてディレクターを引き受けております。

メタバースを使った産業は非常に広いですね。その中でこの課題ではインターバースという、これは造語ですが、ユニバースに対して仮想空間メタバースの間を行ったり来たりする技

術に特に注目をして課題を集めました。

と申しますのは、メタバースを活用する仮想通貨であるとか、あるいはエンターテインメントという分野もちろんあって、これ日本も有力ではあるんですが、より日本の勝ち筋を考えたときに、仮想空間の中だけで解決しない、例えば仮想空間の中でマッチョで健康になっても、実空間でポテトチップス食ってたらどうしようもないわけで、いかに価値を製造、物流、健康といった実空間に還流できるかというところに着目しております。

通し番号007を御覧ください。これはS I Pが始まる前に調べたものですが、30%がファイナンスですから仮想通貨、30%がゲーム・ソーシャルメディアと期待されていて、逆を返すと残り40%が私が申し上げたインターバースという領域になります。今回はここに着目しております。

当初我々が始まる前の予想でまいりますと、当初の10年後、2033年にこのバーチャルエコノミーというのが1.6兆円ぐらいの市場規模になるだろうと。我々が何もしないときに対して約7,000億円の上振れを持たせるような、こういうような基盤技術をこの中で出していきましょうということになりました。

通し番号009を御覧ください。これは私の持論なんです、ユニバースというものがございます。その外にメタバースがございます。ユニバースの様々なサービスビジネスにおけるタッチポイントを、今中国は入っておりませんが、例えば米国のビッグテックがかなりうまく取っております。当然メタバースも取りそうな感じです。非常にやはりタッチポイントを取りますと、データが手に入り、A Iの時代ですから非常に優位にビジネスを展開していくことができるのは申し上げるまでもないことです。

これに対して、ちょっと古いですが、インダストリー4.0を掲げたドイツは、赤いところは取れないので、シーメンスやS A Pが得意としているあたりで、今の言葉で言う製造業のD Xのところをタッチポイントとして取ってきた、このように私は理解しております。どっちへ行くのかというのに対して、私は第3極があるというのが今回の提案です。

実は、このビッグテック、欠点というわけじゃないですが、とにかくものすごい金を集めて180億ベクトルで学習すればきっとすごいラージランゲージモデルができるだろう、それには日本全国のG P Uを超えるG P Uが必要だが、ものすごい資本を集めればできるよと、こういう考え方で。残念ながら日本の企業はこの考え方に太刀打ちができません。

一方で彼らはすごい金を集めてすごくやるので、極めてジェネラルなデータを画像でも何でも集めていって、むしろ非常にローカルな、私は現場粘着性の高いデータというんですが、簡

単に隣に使えるようなデータはまだ現場にたくさん残っていて、それはスマホやChatGPTだけでは集められないものが多い。そこに様々なセンサーや製造機械や自動車や、日本が持っている産業を生かすことができ、失敗ストーリーはこれを全部差し上げてしまうというストーリーです。そうではなくて私の考えは、ここにインターバースのサービスまで自らやって、彼らとけんかするわけじゃなくて、一緒にステークホルダーとして戦っていけるようにしていきたい、これが私の考えるストーリーです。

通し番号10番、その中で実際にはまずマネジメント側として私がプログラムディレクターに選任されまして、サブプログラムディレクター、若手で女性でスタートアップで大学の先生ということで、玉城先生にお願いをしております。スマートシティ絡みのNECの望月さん、それからデジタルアーキテクチャを私と同じく産総研の小澤さんをお願いをして、プロジェクトマネージャーを、若手ですが、元官僚の中村さんをお願いをしております。

後で採択されたのが、ざっと駆け足で申し上げますが、基本的にはAグループというのは、サブ課題Aというのはヒューマンスケールスケールのものです。Bというのがまちスケール、Cがプラットフォーム、Dは後でお話ししますが、標準化とか人材育成という部分を横断的に見ると、こんなふうになってございます。

通し番号11番を御覧ください。これは全体を俯瞰した一つのイメージモデルですが、先ほど申しましたように、左側に実世界、ユニバースがあって、右側に仮想世界メタバースがあって、その間を行ったり来たりするインターバースがございます。上の方にアプリケーションとしてのサービスがあり、下の方にはインフラとしてのデータベースや標準的な技術があって、更にその下にAPIとかSDKとか人材育成とか標準化、こんなものがあるようなイメージでございます。

このテンプレートに沿って私どもが採択した8+1の課題をちょっと駆け足で御説明したいと思います。

最初が通し番号12番、H2Lというスタートアップです。ここは固有感覚という、我々が触覚、後で出てきますが、触覚ではなくて、重いものを持ったときにそれが重いと思えたりとか、自分の姿勢を感じる感覚で、これは人間の筋肉や靱帯が持っている感覚です。これを計測して、しかも刺激して他人に提示できるという技術を持っておりまして、例えば皆さんがある場所ですりんごを持っていたら、遠隔ですりんごを持っていない人にりんごを持った重さを感じさせることができる、こう考えてください。これを使って様々な職業訓練や観光、それから今スポーツのトレーニングなどをやっていこうというようなところでこの話が展開をしているとこ

ろでございます。詳しくは後ほどお話しします。

それから、通し番号13番、こちらは産総研の私どもの部署が採択されたものですが、清水建設や何かと一緒にあって、今日もそうですね、リアルに人が集まるケースと遠隔で働くケースが両方あるハイブリッドの未来のオフィスというときに、ともすると遠隔の人が議論にうまく参加できなかったりとかそういうことが起きる。むしろそうではなくて、ハイブリッドを生かしてオフィスの生産性を向上させることをやろうというようなのがここでやっているところでございます。清水建設が最終的な普及を担う、コンテンツのところでバンダイナムコピクチャーズが協力すると、こんなふうなことになっております。

続きまして、同じく産総研ですが、通し番号14番、人工知能研究センターのもの、ここはかなりシャープに入っております、やろうとしているのはパーキンソン病の患者さんの歩行を改善するということです。残念ながらマーケット規模はあまり大きくはないんですが、仮想空間には患者さん個人の全身の筋骨格モデルというのがあって、実は聴覚もついています。これに対してどういう刺激を与えるとこの患者さん個人はうまく歩けるかというのを仮想空間で予測した上で実空間で介入させることで歩容や生活を改善し、これをグルグル回していこうと、こんなふうなことになっております。こちらはORPHEというスタートアップ企業が出口を担っております。

通し番号15番、こちらは東京大学、篠田先生のところのプロジェクトで、触覚です。これは超音波を使って触覚を遠隔提示することができまして、これで癒しとか、あとは様々な教育とかいうふうなところに展開をしております。

ちょっと急ぎます。通し番号16番、こちら広島大学で、こちら触覚になっておりますが、これは振動を使ったトラディショナルなと言ってはいけないですが、振動提示で、これで車のシボ面、インパネのシボ面を仮想空間で設計して、金型をつくらずに、ああこうなるのかとか、つくってから3年たったときに、ああこれぐらいへたってくるのかというのが設計段階で体感できるようなことをやろうというようなのがこの出口でございます。広島ですから、自動車会社と連携してということになります。

通し番号17番、こちら山形大学で、今度は味嗅覚です。これは食材をプリンターでつくる、3Dプリントの技術をやっている古川先生のところで、例えばお寿司を考えていただくと、見た目も形も味も同じものをプリンターでつくる、お米とお魚からつくるのではなくてですね。ただし、硬さを自在に変えることができますので、同じ見目で同じ硬さでほろっと崩れる介護食というのを新しいマーケットにしようと、こんなふうなことになっております。

続きまして、まちレベル、通し番号18番、こちらは竹中工務店さんで、街でもともと感情推定、感情計測をするというのをやっておったんですが、街で合意を取るのがなかなか大変なので、デジタルツインの仮想の街の中でこれをして合意形成をしていこうと。後でお話ししますが、今名古屋で具体的に進んでおります。

通し番号19番、こちらは東海大学機構、名古屋大学ですね。メタワークといって、タイミーというサービスがありますが、あれの遠隔版です。物流のところにロボットが入っていて、それをスマホで遠隔操作をすることで、2時間とか短い時間を働くことができる、そういうような地域社会をつくっていこうということです。

最後が通し番号20番、NTTドコモのコンソーシアムで、ここは個別のアプリケーションというよりは、こういうような様々な技術を簡単につなげることができる、そういうようなAPIをつくって、特にその標準と普及を図っていこうというのがSIPの中に入っております。

ちょっとまだ30秒ありますが。

それに対して、課題Dの中では人材育成、それから私が個人として得意としております標準化、そして全体をつなぐELSI、特にRRIと呼ばれる、コオロギ食みたいなことになってこの手のインターバースが市場にならなくなると困るので、早い段階から消費者を巻き込んだコミュニケーションを図りつつ研究を進めていくというような方法論を横断的にやっております。

ちょっと時間になりましたが、そのために通し番号22番、メタコンソーシアムという全ての参加が入ったコンソーシアムを間もなく立ち上げて、今お話しした標準化の戦略、ELSI、人材育成というところは個別の採択されたところだけじゃなくて、このコンソーシアムで見えていこうということになっております。

以下はそれに沿って標準化を戦略的に進めているというスライドでございます。

私からの説明は以上となります。

○鈴木議員 ありがとうございました。

それでは、御説明いただいた内容について、まずは有識者議員の皆様から御質問、御意見ございますでしょうか。では、佐藤さん。

○佐藤議員 どうもありがとうございました。

今御説明の中で標準化の話が出ましたが、このインターバースの特に技術面、サブ課題AとBに関わる場所だと思いますが、他国と比較したときの我が国のレベルは、どのぐらいのレベルになっているのでしょうか。それとの関係において、標準化を目指す上で他国との比較に

おいてどのような戦略を持って進めておられるのでしょうか。お聞かせいただければありがたい。

○持丸PD まず、技術の競争力ですが、もちろんこれ調べておりまして。やはり目で見ると、耳で聞くというところは既にデバイスもかなり出回っていて、例えばアップルさんから強いのが出てきていて、もちろん日本企業もやっております。やっておりますが、この部分で圧倒的ということは残念ながらないですし、市場においても、ちょっと申し上げにくいですが、やや後塵を拝していると思っております。

一方で、我々も採択をいたしました。触覚、それから味嗅覚といったようなところは、日本が十分に技術的にも競争力を持っております。ただこれにはちょっと補足がありまして、何で競争力があるかというところ、市場が小さいからですね。つまり、参入しても価値がないとビッグテックは思っている。この部分はやっていないということで、この先行者優位をいかに生かすかということになると思います。

それから、もう一つの御質問の標準化ということになるんですが、標準化の方は、まず我々が採択された先生方の中にもこれに関わっている先生がいるんですが、それだけでは戦略的に網羅できないので、IEC、ITU-T、ISO、それからフォーラム標準で、このインターベースの、特にまずは今言った触覚とかそういうところも含めたあたりの標準に関わっている人達をリストアップして、インタビュー調査をして、通し番号25番に出ているようなマップをつくっております。基本性能や互換性やマネジメントという基盤標準で、どのワーキンググループでどの国が主体になっているのかとか、それらを最終的に尺度として生かしていく、戦略標準がどれぐらい取れているか。これは標準というのは、私が申し上げるのもあれですが、個々の先生方は局地的に頑張っているんですが、なかなか全体としての司令塔がないというのがどこのフィールドでもそうで、我々はこれをしっかり調べて、先生方にもこれを開示して、メタコンソーシアムの中で、どうです、このあたりを連携して動きませんかとか、我々のやっているテーマの先生を交えて少し戦力を増やして、このあたりを取りに行きませんかというようなことをやっております。

今固有感覚のところはIECのところではテクニカルレポートが出そうで、まず第一弾としては取れそうだなというような、そんなような状況でございます。

○佐藤議員 ありがとうございます。

追加的に一つ。触覚とか味覚と言われましたが、例えば日本人の味覚とインド人の味覚とフランス人の味覚と全部違います。そういう人種的・文化的に異なるものを標準化するという事

は極めて難しいのではないかと感じますが、一方で逆に、日本人の味覚の鋭さが競争力になるということがあるのかどうか、追加的にもしコメントいただければありがたい。

○持丸PD 標準の戦術的な常套手段ですね、御指摘のとおり、極めてローカル、感性に近い領域はまずは手を出さないで、とにかく触覚だったらばこういうようなデバイスがこのクオリティ、例えばそれは周波数だったり通信のクオリティだったり、そういうようなところからまずベースを押さえていく。それに関して一般的にはデバイスを押さえるのではなくて、評価尺度を押さえていく。デバイスを押さえようとするの特許のあるデバイスっていろいろけちがついたりしますので、そういうような作戦で、その上に私たちの戦略としてはコンテンツとサービスで、さっき言った日本人の優れたところとか、あるいは優れていても世界に通用しなければ意味がないので、やはりローカルなデータを集めに行くというようなこともこのインターベースの中で展開できればと思っております。

○鈴木議員 それでは、梶原さん。

○梶原議員 御説明ありがとうございました。

出口のところもしっかり見えていて、XR Lという視点で進んでいるように伺いました。そのXR Lで、今出口のところ、グローバルのところはなかなかとおっしゃっていましたが、グローバルを市場として見ているのかどうか。先ほどパーキンソン病の市場は小さいが、スタートアップが手掛けようとしているというお話がありましたが、このお話の中では市場をどう見ているか。資料では国内を前提に書かれていましたが、グローバルをどのように見ているのかという点が1点。

XR Lの視点で言いますと、国内に浸透させようとするときに、日本の制度的なところで実は課題があつてだとか、そこをどう解決しようとしているかということがもしあるのであれば、その辺の観点から伺えればと思いました。お願いいたします。

○持丸PD ありがとうございます。

例えばグローバル、残念ながら全てではないんですが、それなりに視野を入れてやっているところがあって、我々もまずそこをターゲットとしています。

残念ながら御指摘のパーキンソンは、後でお話しする事情でそう簡単にはグローバルに出られません。むしろ、グローバルに出られるのは、先ほど言いました遠隔のロボット操作の部分とか、それから味嗅覚や触覚での遠隔のトレーニングとか、そういうようなところの方がアジア圏も含めたビジネス展開が、既に話も来ていて、できそうなところなんです。それから、そのベースになるNTTドコモさんも、原則としてはグローバルで出て行くことを考えています。

なかなかグローバルに出にくいのは何かというと、御指摘のとおりそこが制度的な部分でして、先ほどの標準とはちょっと違う、一つはローカルな制度と商慣習みたいなものがございまして、やはり医学系の中に入ってまいりますと、どの国も医療というのは強い制度と慣習を持っていて、パーキンソニズムというのをガッツリ医学に入っていくと、正直言って国内でもかなり展開するのが難しいと。

実はパーキンソニズムのチームはそのことも踏まえて実は患者団体というのを軸にして今データを集めようとしているんですね。この方が国内も少し制度が取れるし、もしかしたら、患者団体も国際連携しているので、国際的にも行けるかもしれないんですが、ただそれにデバイスがくっつくと、いや、やはりそれは医療承認が要るんじゃないかとか、そうすると海外に出るときどうなるんだというところはちょっとまだ課題としてあって、簡単にいきません。

それから、先ほど街でどうのこうのと言ったのも、もちろん竹中工務店も国際的なものは見ておりますが、やはり彼らがベースの技術の街の中の暮らしている人の感情というのが今のところ日本にローカライズされた技術になっていて、海外に出て行くには、もちろんこういうようなところを海外のデベロッパーと一緒に少しベースのところのデータを集めて再学習するというようなところが必要で、ちょっと今のところはまだまだ大きく出る計画になっていないというのが実情でございます。

○梶原議員 ありがとうございます。

そうすると、国内という観点で見ると、さほど制度的な大きな課題がある様子ではない、先ほどの医療のところは若干あるようでしたが、という理解でよろしいですか。

○持丸PD まあそうですね。もちろん街づくりに入ればそちらはそちらで別の省庁さんもらっしゃるわけですが、今のところ大きな課題にはなっていないというのは、例えば採択されている竹中工務店さん自身がそういう省庁さんとのつながりが深くてやってらっしゃるので、どちらかというとスタートアップが攻めていくというときの方がやはりいろいろ省庁の制度や慣習の壁にぶつかることが多いかなと感じています。

○梶原議員 ありがとうございます。

○鈴木議員 それでは、波多野さん、どうぞ。

○波多野議員 私は科学大学として医学と一緒にだったので、そこをやはりお尋ねしようと思っていました。

先ほど、いずれにしても現場粘着性が高いデータというのが日本のコアであって、そこをインターバースも含めて進めていくというのはこのS I Pの肝であると思います。

その上で、先ほどの医学のデータ、例えば触覚は周波数帯域で定義する、それは体内では例えば神経ネットワークの現象に基づいているというようなエビデンスを基に標準化を取得すると強いと思います。医療機器への展開というのは難しい問題もあって、そこは必ず解決しなければいけないと思いますが。

その場合に、医学系の方との連携というのも必要となると思いますが、このS I Pは医学系のメンバーがいらっしゃるのでしょうか。

○持丸PD 御質問ありがとうございます。

まず、そういう意味での医学系のメンバーは中に入っておりまして、それは医療制度を変えるという意味ではないんですが。

これ先ほど佐藤先生からの質問とも絡むんですが、やはり触覚の標準、固有感覚の標準というときに、いきなり感性のところにいかないで、もうちょっと身体側の、身体のもってるセンサーとしてどれぐらいの周波数でどれぐらいの強度を感じるのかというエビデンスをもって、だからデバイスとしてどれぐらいの、通信規格としてどれぐらいを保証しなきゃいけない、こういうふうには標準は取っていくような感じでして。その辺は波多野先生の御指摘のとおり今の戦術で進めているところでございます。

そのレベルにおいては、もちろん私たち人間工学のメンバーも入っておりますし、医学的な先生方も研究のメンバーに入って御協力いただいている、そういうような感じになります。

○波多野議員 分かりました。ありがとうございます。

○鈴木議員 私からも一つだけ。医学のところで、本当に人間の五感を、要するに遠隔で操作できる、あるいはセンシングできるということが実はすごい肝だと思っていて、これ医学的にいうと、治療とかそういうことに使う前に診断に使える。今、遠隔医療は問診のところで結構嫌がる人がいるんですが、具体的に視覚と聴覚まではできるが、触覚はない。これに触覚が入って、嗅覚が入ったら、ほぼ遠隔医療はリアルで見てるのと同じになる。そういう展開みたいなものだと、先ほど言ったような規制とかは入ってこないで事業になるかなという、ちょっとね、分かりません、僕も、そういう考えはどうなんだろうという御質問です。

○持丸PD ありがとうございます。

まず、おっしゃるとおりでありまして、マルチモーダルになりますといろいろいいところがあって、それは感覚的な総合的な情報量がリッチになって伝わるということだけではなくて、実は伝える情報量をさぼることができるんですね。ちょっと何かの解像度が低くなったり通信量が落ちても、実は臭いが感じられていればすごくリアリティが感じられるということで。マ

ルチモーダルというのは双補完的なところも持っております。

それを我々はどちらかというとB to B to C、B to B to Gという形で展開をしようとしているんですが、おっしゃるとおり、それが遠隔診療とかそういうところに最終的には行けるといいなと思うんですが、やはり一つの問題が今視聴覚に関するデバイスはスマホも含めてすごく末端まで普及しているんですが、新しいデバイスを末端まで普及させるのに若干時間がかかるし、日本の企業だけでやることではないと思っていて、まずはそれをガッツリ導入できるようにところから始めて、少し製品的、技術的にこなれてからそういうサービスに入っていくといいなと思っています。

ただ、全体の戦略として、その手のサービスをずっと後回しにしていると、最後そのデバイスやった人にタッチポイントごそっと持って行かれてしまうので、できるだけ早い段階から、若干チャレンジングにやっていただける方々をとって、ノウハウやデータは少し取っていただくというのがプログラム全体の戦略になってございます。

○鈴木議員 この辺で一応公開部分を打ち切りたいと思います。

午前10時30分 閉会